

ナマステ

特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌



125 号

2016 年 9 月 10 日発行号

夏が終われば秋～冬へ！！

事務局にとっては正念場の 8 月を無事に終えてホッとしています。夏の活動の成果を熟成させる期間となる秋～冬は美味しいものをいっぱい食べて、夏を振り返り、翌年につなげていく大事な時期だと認識しています。小菅の山もマイタケやマツタケが生える準備をしているのだと思うと、ちょっと嬉しくなってきます！！



こすげ冒険学校の忘れ物です。心当たりある方は、事務局まで！！

■ 活動報告 ■

その1 「こすげ冒険学校」 報告 8.4～10

『2016 年度 こすげ冒険学校 後記』 こすげ冒険学校 村長 雫 永法

今年の冒険学校が終了しました。参加者 17 名、スタッフ 29 名（延べ人数）の体制でした。今年は 5 年生までが 13 人で 6 年生以上が少なく、どんな冒険学校になるかな・・・と思っていましたが、いざ始まってみるとそれは杞憂だったということがわかりました。

今年は人が野外活動をする中でどのようなことに興味を持って生活共同体になっていくのかということが顕著にあらわれたように感じます。

まずリピーターである子どもたちが自分たちからどんどんと動き出しました。心の中に溜め込んできた色々な思いがあったのでしょう。

キャンプ前半のブームは焚き火でした。

ちょうど子どもたちが鉈（なた）で加工しやすい板材がありました。焚き火にちょうど良い細さに割っていくのが面白らしく、交代で細い薪づくりを楽しんでいました。人が本当に楽しんでいる姿を目の当たりにすると自分もやってみたくなるものです。初参加の子どもも自分から「やらせて」と声を発し、はじめは恐る恐る、そして次第にスムーズに鉈を扱えるようになっていました。



参加者の皆様には、写真の CD-R を同封しましたぞ！！

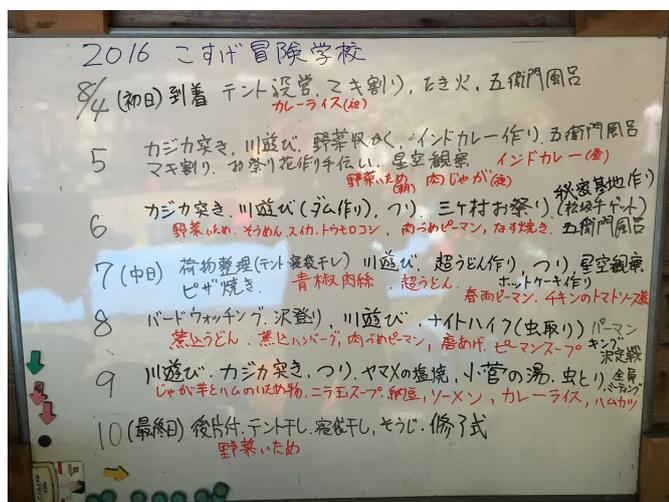
「薪をもっとお願い!」「うん、わかった!」そんなやりとりを交わしながら、しばらくすると頼もしい薪職人が何人も生まれていました。勿論、適時スタッフが声を掛けて安全に扱えるように指導はしましたが、そして、あっという間にキャンプ場の中に小さな焚き火がそこかしこに出来上がっていきました。

同じ火を囲み、見つめながら一心にあおいでいる子どもたち。

それぞれ興味を抱くポイントに違いがありました。どうやったらうまく燃えてくれるのかということを探り直し確かめる人、杉葉の燃え上がる瞬間（油分が多いために多量の煙に一気に着火する）を追い求める人、細い枝をつぎ足しながら小さな火の揺らぎを楽しんでいる人…。

材を集めたり、作ったり、運んだりしながら徐々に徒党を組んで同じたき火を囲む。興味は異なっても、焚き火によって人がつながっていく様子がよく見えた時間でした。

今回は焚き火から見た子どもたちの様子について書いてみましたが、時間的には初日・二日目の出来事です。ここからまた更に展開していくのですが、続きは次回のお楽しみということで…。



その2 「やまめ・いわなキャンプ」 報告

8.13~15

『やまめ・いわなキャンプを終えて』

やまめ・いわなキャンプ 村長 鈴木英雄

キャンプをやるたびに、終わるとああ、いいキャンプだったな、といつも思います。今年もまた実に穏やかな充実した時間を過ごさせてもらいました。参加された皆さんならびにスタッフの皆さんに感謝申し上げます。

やまめ・いわなキャンプは、夏の冒険学校が終わって数日後に一泊二日の2連続で開催されます。1泊だけの参加でもいいし、2泊してもよいことになっています。また他のキャンプと違って親子参加を推奨していて、大人の参加が認められています。もちろん子供だけで参加してくれる方もいます。冒険学校は1週間ありますから、長すぎて参加できない子供たちの受け皿にもなっています。



実は数年前にあまりに参加者が少なすぎて、昨年はずいぶんこのやまめ・いわなキャンプの存続を議論するまでになっていました。そんななか昨年参加されたのは3組の親子6名と子供だけの参加1名の7名という少ない人数でキャンプが始まりました。始まってみるとそのキャンプも実に充実したいいキャンプで、特に大人の皆さんが帰りたくないと言ってくださって、キャンプを開催する側の人間にとって、こんなう

らしい言葉はありません。この言葉のおかげでキャンプ存続の議論は霧消し、今年も同じように開催されました。

やまめ・いわなキャンプの参加者は大人がいるので、幼児の参加も認められています。したがって参加している子供たちの年齢層がかなり低めです。今年は4組の親子14名と子供だけの参加者4名の計18名でキャンプが始まりました。そのうち就学前の幼児は5名いました。参加者の顔ぶれは子供たちだけのキャンプとは全く様相が異なります。スタッフも一週間前の冒険学校とは入れ替わりです。スタッフの役割も少し変わって、親から離れない子供たちをいかに子供たちだけで遊ばせるかがスタッフの使命です。それは容易ではなくキャンプが終わる頃になってやっと、ということがほとんどです。しかし子供たちにとっては、親からの自立だけでなく、親との絆



を深める絶好のイベントでありますから、スタッフとしても場面に応じて子供たちとの接し方を考えていきます。大人の皆さんには、せっかくのキャンプですから、子供たちが少々羽目を外してもできるだけ怒らないように、とお願いしています。また、子供たちのためを思って参加を決めたと思うのですが、キャンプ中は子供たちのためを半分くらいにして、あとの半分は是非、自分のためを考えて楽しんでくださいとも言います。キャンプは楽しくなければいけません。最後まで笑顔で過ごしてもらいたいと思います。

宮沢さんご一家は、就学前のはなちゃんご両親の3人で参加されました。はずかしがりやのはなちゃんでしたが、すぐにほかの子供たちと仲良しになりました。4家族の中で唯一1泊でお帰りになるため、みんなに見送られての別れとなりましたが、帰りたくないという気持ちとそれでも帰らなければならないという葛藤が見て取れました。ご両親ははなちゃんが納得できるまで待ち続けました。帰りの車の中でいいキャンプだったとおっしゃってくださいました。山口さんご一家は、転勤で10月には青森に引っ越すという状況の中、最後の東京での夏は、家族でキャンプをすることにしていました。私たちのキャンプを選んでくれて、こんなうれしいことはありません。山口さんも1泊の予定でしたが、子供たちの様子を見て、2泊に延長されました。何度もいい経験をさせてもらってありがとうございました。辻さんは小3のうららさんとおとうさんと参加されました。うららさんはなにかにつけパパ、パパと呼んでいて、仲のよい親子です。おとうさんはこのキャンプがご自分の仕事に生かせないかいつも思案していました。仕事人間の悪い癖です。佐々木さん一家は、常連さんです。キャンプ中の過ごし方も楽しみ方もよくご存じです。昨年も参加されていて、このやまめ・いわなキャンプは、今後も続けていかなければと思わせてくれたご家族です。

私たちスタッフはボランティアです。しかし参加者の皆さんにお金



を払ってもらってキャンプをやるわけですから、意味あるキャンプ場での生活を提供しなければなりません。無償で手伝えるのだからこの程度でいいや、とは到底思っておりません。だからといって小難しい議論で自分たちを縛るのもほどほどにしなければなりません。ただただ、楽しかったです。私たちにとってもいいキャンプでした。素晴らしい時間を過ごさせてもらった皆さんに改めて感謝申し上げます。来年もお会いできることを楽しみにしています。



「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから20年④

この2016年も8月13日～23日、タイに行ってきました。いつものごみ(中込貴芳)、ごめ(中込卓男)のほかに、20代の贅田隼人(だにえる)さんが参加しました。昨日のことを思い出すのも困難なぐらい毎日が新しい体験の10日間でした。次号の「ナマステ」で、活動報告が寄稿される予定です。なお、10月8日から10月16日までタイ・ラジャバト・プラナコーン大学のラダワン先生、シリワット先生が院生や学生を連れて総勢8名で、来日されます。都心と小菅村を中心に環境学習にかかわる研修をされます。案内するボランティアスタッフが不足しています。お手伝いくださる方は事務局までご連絡ください。(かつてな編集人 中込卓男)



▲クアーンサラオのカレン族のルン・ボヨーさんに畑と栽培している植物を見せていただいた。

タイの鳥 III

若林 卓司 日記より

2006年8月21日

ラーチャパット・プラナコーン大学でゴミさん、ゴメさん、それに後から合流した菱井くんと待ち合わせ。シリポンさんの奥さんのポータンさんとラームさんにウタイタニーから迎えに来てもらう。途中でスパンブリーにある「水牛村」と「100年市場」に寄る。水牛村ではバンコクから来た小学生と共に水牛のショーを見、その後で水牛二頭が引く車にのった。自動車では難儀する泥道でも楽々進むので驚いた。

100年市場はラマ7世時代の徴税吏の家を中心に、ターチン川沿いにできた市場ということだ。スパンブリー出のバンハーン元首相と同じような顔のよくしゃべる人が案内してくれた。夕方にシリポンさんのパンダキャンプに着いた。彼が副理事長を務める職業学校から、理事長もみえて一緒に夕食。テントに泊まる。

8月22日

シリポンさんの学校を案内してもらってからフォーワイカイケーン鳥獣保護区に行く。ラームさんが同行してくれた。シリポンさんの手配のおかげで研究者用の建物に宿泊できた。昼食の後、ヒンデー自然観察トレールを職員のソムチェートさんの案内で歩く。ヒョウ、トラ、ゾウの痕跡があ

ちちちにある。教えてもらわねばわからないのだが、宿泊地の近くにいろいろな動物が出没しているので驚いた。野鳥に興味を持つゴメさんに初めての鳥がたくさん見られたり、ツノゼミの写真が撮れたりしたのがよかった。戻ってから、スー・ナカサティアンの像にいき、嘗て彼がこの鳥獣保護区の所長として生活をしていた宿泊所に行く。もう、16年前になる彼の死を契機としてタイでは自然保護運動が力を持つようになるが、ずい分皮肉な成り行きだったと今でも思う。この近くにもトレールがあるので、そこに入る。ここで私にもポンティップにも二度目になるミカドバト (Green Imperial Pigeon) を見た。



夜にはシリポンさんの知り合いの、ここでレインジャーを29年やっているというフーンさんと

奥さんがやってきて色々話をしてくれた。フーンさんは昔、狩りをしたというが今は真剣に自然保護の職務に励んでいるという。スープのことを話してくれたので、私はスープの死の原因を聞いてみた。結局、はっきりしたことは言わなかったけれど、鳥獣保護区から不法に利益を盗み出そうとする地方のボスや政治家に多くの敵を持っていたことだけは話してくれた。途中で私はシャワーを浴びたので、ポンティップが通訳を代わってくれたが、なんとか役には立ったみたいだ。9時に発電が止まってしまう、真っ暗な中でさらに色々話を聞いた。私たちが泊っているところは昔、トラがよく出たところだというし、ヒョウは今でも出るというので、10時過ぎに寝床に入ってから、再び12時ごろに起きだして、懐中電灯で辺りを見回したが、何にも出会わなかった。

8月23日

朝、宿泊所の回りを探鳥した。ラームさんが巣から落ちたヒナを見つけた。巣立ち前のヒナだがほっておけないので、近くの木の高さの3メートルほどの高さにある巣に身軽な菱井くんが帰してくれた。



何の鳥だかよくわからなかったが、しばらく離れてみているとオングロバンケンモドキ (Green-billed Malkoha) が巣に入った。鳴いていたヒナの声も鳴きやんだ。私たちは、その後出ていった親鳥がもう一度巣に入るのを確認して

から、朝食を食べに行った。



朝食後、今度は研究者用の「トラの家」トレイルにソムチュートさんの案内で入った。ここにはヒョウ用とトラ用の罠が仕掛けられていた。掛かれば発信機を取り付けるのだという。また、ゾウが出没した跡が生々しかった。帰ってからトラの発信機を取り付けるための捕獲やこの鳥獣保護区についてのビデオを見せてもらった。その後私たちはフーワイカーケンを後にして、まず、「フック・パー・タート」と呼ばれている石灰岩の岩塊に取り囲まれた空間に生えるヤシの林に行った。以前はここへは上からロープを使って懸垂下降をするしかなかったと思うが、今は洞窟をくりぬいて道が作られている。このヤシの実実は「ルーク・シット」といってタイ式のアイスクリームなどには入っているやつである。ここを見学してからランサックという中・高等学校へ行った。

この学校のすぐそばの洞窟にコウモリが生息していて、この学校ではこのコウモリを題材にして環境教育を行っているという。その話を先生に聞いた。その後、一緒に食事して、戻ってきたときには、コウモリは洞窟から次々に飛び出していたが、長い帯になって、波状を描き、途切れることがなかった。百二十万匹と推測されているらしいが、なかなか見事なものだった。でもどうやって元の洞窟にもどってこられるのだろうか。

パンダキャンプに戻り、遅くまでシリボンさんと話した。私もそうだがみんなも足がとてにもかゆいという。赤い斑点があちこちに出ている。フーワイカーケンにはリンがいると聞いていた。メーウォンでは悪辣なブヨをリン・ダムと呼んでいるので、ブヨのことだとは思っていた。しかし、メーウォンでは夕暮れになるとこのブヨは活動しなくなるので、フーンさんが来たときも、誰も用心

せず宿舎の玄関先で話した。この時にやられたのだと思う。ゴメさんの持ってきた塗り薬でかゆみはとれたが、とんだ油断である。テントで寝る。

8月24日

今回のメインである。日本側が用意してきたペットボトルで顕微鏡を作る作業を生徒に教えるという初めの予定を変更して地元の先生に教えることになった。先生は全員で11人。結果に誰も満足されたようだった。その間、一緒にやってきた小6と中1の生徒には菱井くんとポンティップがかぶとを折ったり、ドラえものの歌を歌ったりして時間をつないでくれた。



▲いつもお世話になっているエーさんとポンティップ若林さん

ペットボトルで顕微鏡を作った残りで丸いわっかを作り、一方の端にビニールテープを巻き付けて、うまく投げると結構飛ぶ。時間がなかったので顕微鏡作りは学校での先生の指導に任せて、生

徒とはこのわっかのとばしあいをして遊んだ。



このわっか飛ばしの合間に生徒たちのサイン攻めにあってしまった。先生も学生もパンダキャンプで昼ごはんを食べて、昼からの授業に戻っていた。私たちはラオ・ヴィエンの集落へ行った。ここはラオス人の集落で、ラームさんの家もここにある。



▲ラームさん

最初の家でマークの木の収穫を実演してもらった。日本でキンマーといっているものだ。わっか状のものに足を入れて、それを細い幹に巻き付けるようにして登る。そして上部の房状についた実をわっかにはさみこみ、いっぱいにならなかつたら、他の幹に移って、足元をいっぱいにして降りてくる。20メートル近く、細いマークの木に登るので、下から見ていると危うい感じがする。菱井君が挑んだがほとんど登れなかった。近くの家に行っておばあさんにマークの噛み方を教えてもらった。



私は田舎にいたとき何度もマークの実を噛んだことがある。乾燥させたマークの実の薄切りにブルーの葉と石灰も少し口に入れるのだが、この石灰には最後までなじめなかった。試みた3人もそうそうに吐き出していた。この後、100年ほどの古さを誇る家に行ったり、織物のおばあさんを訪ねたりした。見学はこれで終わらなかった。再び近くのプ・トイ鍾乳洞へ行った。中が大きな洞になっていてきれいな鍾乳石がたくさん見られた。前日行った「フッ・パー・タート」では外国人は一人200パーツをとられた。私はルーム大の証明書を出してタイ人扱いになったが、こんな片田舎を訪れる数少ない外国人に、この扱いはいただけない。それで、ここでも同じようにとられるのかと思ったが、係の人に先導してもらって、私たちはライト代として一人20パーツを払っただけだった。この日、さらに三人はマッサージに出かけた。遅い夕食を済ましてから、私たちはシリポンさんと夜が更けるまで歓談した。

8月25日

今日は夕方にはバンコクに戻らねばならなかった。朝、パンダキャンプでシリポンさんと一緒に、持っていった木を植えた。それから、ポータンさんとルームさんの案内でカレン族のイーサーイ村に行った。ここにいるボランティアの「あき」さんに会えればよかったが、去年に続き今年も振られてしまった。しかし、カレンの人の信望が厚いのがよくわかった。この村は最近、ゴムの生産を始めたといい、貧富のさが現れてきているようだった。織物をしている女の人のところに行

って色々質問をした。そこの旦那さんがモグラ取りの仕掛けを見せてくれた。私たちはカレンの織物がほしかったが、カンペンペットで山岳民族の運動会が行われていて、そこで売るために「あき」さんがすべて持って行ったそうで、村には何も残されていなかった。その後、さらに奥にあるチャオ・ワット村まで行った。しかし、肝心のチャオ・ワット（シャーマン）がいなかったのでチェディーを見せてもらうことが出来なかった。帰りにバーン・プ・ボーン小学校へ行った。



生徒が40人ほどで先生が二人の学校だった。生徒の家庭が貧しく、また、一学期の予算が一万パーツちょっとで、とてもやりくりが大変だと先生が話してくれた。一棟の建物の二階に職員室、1・2年生、3・4年生、5・6年生が一緒になった教室の区割りを作っているだけで、空いているところに給食用の寺からももらった米俵が積み上げてあったのが印象的だった。裏にはとうもろこし畑が父兄の協力で耕やかされていたが、この前の収穫では一万パーツほどの収益があったそうだが、肥料代やその他を引かれると手取りがほとんどなかったそうだ。結局、ゴミさんが東京の自分たちの会を代表して、全校生徒の前で寄付を行った。帰ると名前を忘れたが学校の理事長が待っていて、顕微鏡の作り方を教えてくれという。かなり、大きな動きになってきているんだなと思った。昼食はカレンの村で買ったシイタケの炒め物が出た。これはなかなかおいしかった。最後に祭りをやっているシリポンさんの学校にもう一度寄って、バンコクを目指した。プラナコーンに着いたのは7時半ごろになったが、シリワット先生とチンナタット先生がまってくださって、新しくできた大学の食堂で夕食を誘ってくださった。

ホテルについていえば、水際族がフーワイカーケンで一匹、マドポタルがパンダキャンプで一匹とれた。
(終)

■ 活動案内 ■

その1 「INCH祭り」～「INCHライブ2016」と「のびと講座きのこキャンプ」で楽しくやっちゃいましょう！！ 9.24～25(1泊か日帰り)

秋の一大イベント「INCH祭り」を開催します！ログハウスのあるキャンプ場で、秋の味覚を堪能しながら楽しい時を過ごしましょう！ライブをBGMに、のんびりとお酒、お茶でも飲みながら過ごしませんか！！音楽を愛する方は楽器持参で、腕に自信のある方もない方もぜひぜひお越しください♪

- 日程 9月24日(土)～25日(日)日帰りもOKです。
- 会場：山梨県小菅村いつものキャンプ場 ■参加費：日帰りの方 1,000円 宿泊の方 2,000円 (ログハウスカテナ

トで寝袋)。バーのお酒はカンパ制です。

- 交通機関 小菅村までの交通は自力でお願いします。
- お申し込み：ライブの当日参加はOK。きのこ採りの方は保険に加入しませんのでケガのないように。



「野外でバーも開催！」

その2 「のびと講座 星空観望会」 12.10～11(1泊2日)

毎年恒例、冬の小菅村で天体観測しませんか。天体の撮影にも挑戦しましょう。この時期は、ふたご座流星群の活動時期なので、普段より多くの流れ星も見ることができます。星空の写真撮影の方法についても解説します。小菅村は東京から近いのですが、星を見るのに具合の良い環境です。

日 時：2016年12月10(土)～11日(日)

場 所：小菅村の空が広く、真っ暗な場所

宿 泊：キャンプ場にてログハウスか星を見ながら寝袋

対 象：小学生3年～一般 15名 ※小学生のみは要相談

費 用：会員 5,000円 非会員 8,000円

※宿泊費、食費、保険代、教材費を含みます。

講 師：中込貴芳(本会副代表理事)

内 容：日中に観察のポイントや天体の話、天体写真講座を行います。夕刻～深夜まで流星を楽しみましょう。夜食は暖かい鍋でも囲みます。翌日は遅めの朝食、小菅の湯で冷えた体を温めて帰ります。

※ パルプか数十秒までの露出ができるデジタルカメラまたはフィルムカメラ(フィルムカメラの場合ASA400以上のフィルム)、三脚をお持ちの方は、ご持参ください。

その3「冒険学校 まふゆのキャンプ」 12.23～25(2泊3日)

毎年恒例の冒険学校「まふゆのキャンプ」を体験して、暖かいお正月を迎えませんか？

小菅村ではお正月の準備がもうはじまる頃です。日中は、村内を自由に動き、村の中でもちょっと面白いところに行きましょう。焚火・薪割り・ナイトハイク・星空観察・バードウォッチング・アウトドア料理・滝探検・・・その場で思いつく限り、いっぱい遊んで、食べて、寝る。そんなキャンプです。個性あふれるスタッフがみなさんの参加を待ってます。

日 程：12月23日(金)～25日(日)

場 所：小菅村のいつものキャンプ場

宿 泊：テントまたは野宿またはログハウス

対 象：小学校3年生～中学校3年生

定 員：20名先着順です。

参加費：会員¥22,000 非会員¥24,000

(奥多摩駅からの交通費・食費・宿泊費・保険代などが含む)

申込み：ハガキ・もしくはE-mailに住所・氏名・年齢(学年)・性別・電話番号を記入の上、12月9日(金)までに事務局まで参加をお伝えください。



常に火とともに生活する2泊3日です！！

『藤農便り』 第 6 号

農業生産法人 藤野倶楽部

藤野での 2 回目の夏が過ぎました。管理する農園が牧野・名倉・佐野川・藤野駅前と分散しているため車で駆けずり回る日々が続きました。週 1 日の休日は援農ボランティアで朝から畑の草取り、夏の間は日没までずっと農園で汗を流しました。おかげで体は締まり、20 代の頃の体型を取り戻しました。お盆休みは宿泊のお客様の対応や洗濯・掃除に追われ、娘や息子・古い友人たちに会えなかったのが残念でした。

・ビオ市その 2

4 号で報告したビオ市ですが、クチコミ以外に新聞・テレビ等のマスコミや広報さがみはらに紹介され、訪れる人が回を重ねるごとに増えています。地元の人たちだけでなく、遠方から前日に百笑の台所ギャラリールームに宿泊される方や観光バスでいらっしゃる団体もあり、ポスター写真にあるように大賑わいです。窓辺の少女たちはウーファーで藤野倶楽部に滞在していたイギリス人の高校生、外国からのお客様が多いのもビオ市の特徴です。

出店数は農家 20 軒・飲食やアロマ等 10 店以上となり、それぞれ自慢の生産物や商品を持ち寄り、来場者と対面販売をしています。つくいやさいのメンバーをはじめとする若手農家のブースには、トマト・ナス・キュウリ・オクラ等夏野菜が山盛りです。ポップも工夫され、お客様の購買意欲をそそります。藤野倶楽部は里山茶と苗の他に彼らの数分の一の夏野菜しか販売できないのですが、ひいきにくださるお客様にいつも励まされます。「春に買った相模半白がよく実をつけているよ。秋野菜の苗もよろしく！」と声をかけていただくと、毎日温室で手塩にかけて苗を育てた苦労が報われます。今はキャベツ・ブロッコリー・ハクサイ等秋野菜の育苗真最中、これからも良い苗を出し続けたいと思います。

この夏のイベントでは、ビオ市のメンバーと篠原で開催された

「e 級グルメを食べ尽くそう!」、牧郷で開催された「森のスコラ」に参加しました。11 月にシュタイナー学園で開催される「藤野まるまるマルシェ」実行委員会からは取材があり、Facebook に紹介していただきました。ていねいにまとめてくださった記事ですので皆さんご覧になってください。



宮本 透 (自然文化誌研究会)

事務局の土屋さんが中心になって取り組んでいる TABICA の企画では、ファミリー向け自然体験「ランチ付き! 有機無農薬のお茶摘み体験 摘みたての茶葉を味わおう@相模原市」を担当、佐野川のお茶の PR をします。

ビオ市やイベントは先輩農家との交流の場になり、とても刺激を受けています。先日、新聞に日本の農業の就業人口が今年に入り 200 万人を割ったと報道されましたが、津久井地区ではこの 5 年間に移住し就農した若者は 30 名を越えているそうです。お付き合いする若手農家のはつらつとした姿は、私に「お茶農家になりたい」と 2 年前藤野に移住した時の決意を思い出させてくれました。秋からは、佐野川でお茶畑を借りる準備を始めます。

・自給農耕ゼミ第 6 回

6 月 18 日、木俣師を講師に藤野駅前畑と結びの家で自給農耕ゼミを開催しました。参加者はお百姓クラブのメンバーや植物の人々の博物館メルマガ読者 12 名、写真のように梅雨の晴れ間にめぐまれて午前中は畑仕事に汗を流しました。私が木俣研にいた 30 数年前に秋山村の農家から分けていただいた赤いアワをはじめ、モロコシ・ヒエ・シコクビエ・ハトムギ・キヌア・アマランサス等、各種雑穀を播種しました。百笑の台所へ移動して昼食、午後からは結びの家で「生業の勧め。欧米の雑穀、古守先生懐古など」をテーマに木俣師の講義です。受講者には幼児もいましたが、皆さんに熱心に聴講されていました。



ゼミ後の管理は木下さん・末村さんと協力し合い草取りやシコクビエ・アマランサスの定植等、時間を作って畑に通っています。作業後に 3 人でビールを飲むこともあり、新しい飲み友達ができ、楽しみが増えました。8 月下旬の台風でキヌアに被害が出ましたが、他の雑穀は順調に生育してきれいに出穂しています。中央線藤野駅のホームからよく見えるので「スズメがきはじめているね」と心配してくださるお客様もあり、関心を持つ方が増えているようです。先日、木下さん宅近くにあるお百姓クラブの雑穀畑を見学しましたがキビやアワがたわわに穂を垂らしており、藤野が雑穀の里になるのもそんなに先ではないと実感しました。3 人で防鳥ネットを張りながら、自給農耕ゼミ第 7 回の打ち合わせをします。

日程が決まりましたら植物の人々の博物館メルマガ等でお知らせしますので、駅前畑においでください。

・高校クラス会

私が生まれ育った藤沢は教育熱心な家庭が多く、中学校の先生たちもそれに応えるべく厳しい授業をしていたようです。1970年代の中学校、毎朝15分の漢字・英単語・計算問題の小テスト、土曜日午後の補習、定期テストの成績は廊下に張り出され、その結果に一喜一憂したものでした。1・2年の学年末には県下一斉9教科のアーチーブメントテストが実施され、「400点以上取らないと湘南高校には入れないぞ！」と各教科の先生たちから叱咤激励されました(県立湘南高校は東大はじめ有名大学に多数合格者を出す湘南・鎌倉学区の進学校)。私はのんびりした性格で農業高校に進学したかったのですが、教育ママや担任に勧められるまま県立光陵高校を受験しました。

私が8期生の光陵高校は当時新設の進学校で将来横浜国立大附属高校に移管されるということで学区がなく、「国公立と早慶上智以外は大学でない」という先生もいて授業はいつも緊張したものです。クラスメイトも必死に勉強していて2年生の3学期になると皆受験モード、しんどくなり競争するのをやめました。当然授業に出るのが苦痛になり、不登校・引きこもりです。

3年の担任は鈴木彬先生、家にいると「宮本君いるかな？」と家庭訪問、親もよく呼びだされその度に父親にはこっぴどく叱られたものでした。欠席が60日を越え、2学期中間テスト後の面談で「このままでは卒業できなくなる。どうするのだ？」と聞かれ、「学校辞めて大検受けて進学します」と答えました。先生は「大検は地方の2期校に受かるくらいの学力がないと合格できない。君にそれだけの学力があるか？我慢して学校へ来て卒業したほうがいい」といわれました。とにかくしつこく面倒見がよく、生徒を見捨てない先生です。それから卒業式前日まで休まず登校、補習・追試が続きました。この憂鬱な日々は青春時代の大きなトラウマとなり、40代になっても時々悪夢となってよみがえり苦しみ続けました。

45才の時、クラス会幹事から電話があり「クラス会を開くけど、鈴木先生が宮本君にも声をかけてほしいといわれているので参加しませんか？」と誘われました。2回目のクラス会で初参加の人も多く、高校卒業以来の再会でした。クラスではポッチだった私ですが、皆と話すと青春時代の悩みは誰もあまり変わらなかったことがわかりました。高校黒歴史のトラウマが癒されるきっかけとなり、クラスメイトとの付き合いが始まりました。5月に横浜で3回目のクラス会が催されました。写真は「クラスの問題児に」と先生からのご指名で記念品贈呈の大役を仰せ付かった時のものです。2次会で「先生の家を訪ねよう！」と盛り上がり、7月に4人の仲間でおじゃましました。高校時代の思い出や今の生活・仕事の話

等、話題は尽きず楽しい時間を過ごしました。

・津久井やまゆり園の事件

7月26日未明、相模原市緑区にある障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者46名が死傷した事件がありました。テレビやラジオを持っていない私は昼過ぎに「相模湖で大変な事件が起こっている」という町の人のお話を聞き、初めて事件を知りました。翌朝の新聞を読み、元職員の容疑者が園生19名を刺殺、彼は障害者を差別し抹殺するために犯行に及んだのだと理解したのです。新聞記事は、大麻の陽性反応があり精神を病んでいること、職場でのトラブルから辞職して措置入院したこと、小学校教員を志して挫折したこと等、容疑者の生活環境に関する内容が大半を占めています。彼の犯行には強い怒りが込み上げられますが、同時に彼を犯行に追い詰めた社会の問題も考えなくてははいけないと思いました。



1%の資本家と権力者が私たちに強制している新自由主義は、2000年代になるとすさまじい格差を作り出しました。高所得富裕層の対極は、年収200万円以下の生活を強いられている1000万人を超える貧困層です。4割の労働者が非正規雇用で、運よく(?)正社員になった若者はブラック企業に酷使され命をすり減らしています。規制緩和によって「命より金」を優先する企業がばかり、社会保障制度も崩壊寸前です。すさんだ世相を反映し、在日外国人や生活保護者、米軍基地と闘う沖縄の人たちを憎悪するヘイトスピーチが増えています。こうした社会で生活してきた容疑者は、心を病んで障害者に対しての差別・優生思想を持ったのでしょう。1930年代のドイツ、ヒトラーを先頭に20万人の障害者を秘密裏に抹殺したT4作戦、第2次世界大戦に突き進み600万人ものユダヤ人をガス室に送り込んだホロコーストの歴史は、差別・優生思想の行き着く先を教えています。

8月2日のピオ市でも事務局が献花台を設け、藤野の山々に咲くヤマユリが飾られました。参加者はそれぞれに思いを込めて、「津久井やまゆり園」犠牲者の冥福を祈りました。私は、学生時代に水俣で甘夏栽培をしている人たちから「胎児性水俣病で体が不自由になった患者さんは、ミカンの木の下で寝ている事が仕事なのだ」という話を聞いた時のことを思い出しました。障害を持った人が隔離・排除されずに地域の中で生活し「寝ている事が仕事」になるのが当たり前の社会では、容疑者のような「障害者なんていなくなればいい」という考えは無くなるはずで

〈お知らせ〉 藤野倶楽部は今年もINCH賛助会員です。INCH会員への特典として、ナマステ今号を持参された方には「百笑の台所」の食事料金を10%割引いたします。アクセスは藤野倶楽部のHPをご覧ください。

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.7 その 8

『冒険探検粉塵記 第 8 話 環境教育学創業のころ』 駄作者 文福洞先斗

時代をワープして 1974 年に戻り、30 年ほどを未来（近現在）に向かって辿ってみたい。環境教育学を創生するために大変お世話になり、最も尊敬する阿部猛学長（当時）がご逝去（2016 年 5 月 26 日）されたこと、ご令嬢からお葉書がくしくも昨日届いた（8 月）。阿部学長は助手からすれば雲上人で、めったにお会いできる方ではなく、恐る恐るお手紙を差し上げ、環境教育学の確立のために下に記すような行動をとることに寛大なご許可をいただけるようお願いした。好きにして良いとのお返信をいただき、これで小雑魚は水を得たのである。

また本日、滋賀大学の A 教授から『日本環境教育小史』をご恵贈いただいた（なお、本文中の登場人物で自然文化誌研究会にゆかりを結ぶことのできなかった方々は仮名とする）。当時、「反社会的」と煙たがられていた環境教育も、今日では「ESD」や「ECO」となって権威づけられ、あまりにも人口に膾炙した。たくさんの関連書が出て、まことにご同慶に堪えないが、一つだけ「痴愚」（ちぐは愚痴ではない）を言っておきたい。

日本における環境教育の創業には、ポンチャンと自然文化誌研究会の面々が事務局として重要な下働きをしたのだが、公的な文書や書籍には事実として記述されていない。私たちは有名有利やメディアを避けて、地道な現場実践と自律した理論構築の作業を続けているのだが、このくにでは、名利を声高に言わなければ、無名非利の任意な市民活動や調査研究の成果は世間に知られず、黙殺され、無かったことになる。たとえ一時有名になっても、学問・思想すら商品とされて、情けないことに消費され、売れ残って賞味期限が過ぎればゴミ箱に捨てられる。

私たち自然文化誌研究会の目的である冒険・探検の志は金銭で売り買いできる商品ではない。このくにの子どもたちや農山村「辺境」（実は源流）の人々に役立ちたいと自費で自律ボランティアに、自由気ままに楽しく継続してきたので、もとより有名有利を求めてはいないから、世間に知られずとも好い。ただ、「痴愚」というのは、こうした無名非利の市民意識をこのくにの人々の 2 割くらいが選択共有しないと、このくにの衰退は免れないということだ。血の気が多く、悟りきれないポンチャンとしては、ここが正直に悔しい。だから、せめてのあがきとして、非公式な事実を冒険探検粉塵記に記録しておきたい。しょせん粉塵の中に生息する一寸の虫にすぎないのだが、五分の魂はあるのだ。

さて、1974 年 4 月から東京学芸大学職業科農学教室の助手になって、ポンチャンの冒険と挑戦の第二の人生が始まった。「職業科」という教科は、他教育学部では中学校技術科（工業）に大方編成されたにもかかわらず、学大は規模が大きかったので残存して、農学教室は主に農業高校教員、商学教室は商業高校教員の養成をしていた。教員免許「職業科」は残存していたが、すでに中学校ではこの教科はなくなり、養護学校（現在の特別支援学校）にのみ、有効であった。いわゆる特殊教育・障害児教育には、農耕・園芸作業が機能改善に有効であるとするモンテソーリ・メソッドの影響が強かったからであろう。

文部省教育大学室長からは「職業科を廃止せよ」とのお達し行政指導が強くと聞き、就職したとたんに「農業教育」は不要だと冷水をかけられた。もちろん、こういう偉いお役人には学長でないで直接面会はできない。年齢も大して違わない学生たちも、役立たない職業科教員免許とこの理不尽に不満を抱いていたので、何とかしようと考え出したのが、農業を基盤とした「環境教育」であった。教授たちは不賛成、助教授たちは何とか賛成してくださったので、環境教育研究会を創ることになった。事務担当として文書の草案はポンチャン助手がほとんど作成していた。環境教育研究会は 3 人の B・C・D 助教授が唱道して創立したと当時の教育新聞に載った。研究会の事務作業はポンチャンの仕事であり、研究会の準備、雑誌の編集、経理など、ほとんどの裏方を喜んでしていた。

しかし、B 助教授から共同研究ではないのに雑草の論文を共著にするように言われて、それは科学的態度では

ないので共著を固辞したところ、「助手は奴隷なので、自分の言うことを聞いてればよい。君を絶対万年助手にする」と言われた。性善説のポンチャンが人生で初めて私的怒りを抱いたことを心に認めた。学園闘争を経て、大学には学問の自由、自治があると思いたかったので、この発言は気に入らず、大いに反発した。国連大学の学長になるとまで言っていた自信家の B 先輩との蜜月、信頼関係は 2 年で壊れた。それでも、環境教育についてセンスがないとはいえ、B 氏の努力がなければ環境教育研究会はできなかったので、世間は公正に彼を評価すべきだろう。その後 10 年ほど、環境教育研究会の事務方は続けたが、残念ながら先細りになった。B 氏の功名心の強さが人々の集まりを阻害したのだから、ポンチャンは以後心して、私利私欲と有名有利を一層戒め、裏方に徹した。志を達成するには多くの人々の助力が必要で、ほんとうに無欲でなければ、誰も援助はしてくれないことを、大学就職 2 年目で心にしみて学んだのである。

低迷した環境教育研究会を離れて、日本環境教育学会準備会を始めることにした。前轍を踏まないように、3 年間かけて、周到に呼びかけ人を 500 名ほどに増やしたところで、日本環境教育学会を創立する戦略をとった。自然文化誌研究会は着実な地ならしをしていった。この間の概略史は、『民族植物学ノート』第 7 号に記録してある。現在も継続している環境学習セミナー（2016 年 9 月で第 38 回）は、1984 年に第 1 回野外教育セミナーとして始めた。第 4 回の後、写真に示した第 1 回野外教育シンポジウム（1986、東京学芸大学）、第 2 回野外教育シンポジウム（1987、大阪教育大学）、第 3 回野外教育シンポジウム（1988、愛知教育大学）、第 5 回、第 6 回野外教育セミナーを挟んで、第 4 回野外教育シンポジウム（1989、信州大学）を経て、第 5 回野外教育シンポジウム・日本環境教育学会創立大会（1990、東京学芸大学）へとつなげていったのである。この間、自然文化誌研究会の会員は事務局を運営するにとどまらず、中込卓男代表理事、宮本透さん、河口徳明さんなどが実践研究の成果発表も行った。

一方で、ポンチャンの冒険主義的戦術も併進していたのである。非公式事実として記録しておく。当時、ポンチャンは環境教育学会を創立することに人生をかけていた。色男には金も力もないので、藁をも掴むつもりで支援者を求めていた。たまたまラジオを聞いていたら、青少年団体の D 理事長が野外教育に熱心だったので協力を求め、文部省の E 初等教育局長に紹介いただいて、環境教育学会を創ることに支援をお願いした。この頃、ポンチャンは恥ずかしながら、一世一代の大芝居で、赤坂のパブだったかで、D 理事長や E 局長と酒席を共にして、カラオケで中島みゆきの「悪女」まで歌ってのけたのである。ポンチャンがジャイアン・レベルの音感の持ち主であることは前に述べたとおりである。

また、農村開発企画委員会の石川英夫専務理事が第 1 回野外教育セミナーの開催告知（たった 2 行程度）を新聞で目にとめられ、明峰哲夫さんの都市を耕すが話題であったので、聞きにお越しくださり、その後とても親切に支援して下さることになった。森とむらの会を創るので参加するように誘っていただき、石川さんのご紹介で高木文雄会長にお引き合わせいただいた。高木先生はポンチャンの行政学の老師となったのである。彼は大蔵次官の後、国鉄総裁など多くの役職を歴任された。もちろん自然文化誌研究会会長もして下さった。こんな偉い方とポンチャンが会議や研究会の後で、石橋隆明事務局長と 3 人で、奥様には内緒で、親しくビールなど飲んでいたとはだれも知らないことであった。高木先生は願いを大方聞いてくださり、先生のかばん持ちということで、多くの省庁次官・長官・局長など高級官僚にご紹介くださった。無口のポンチャンは短時間の会見で環境教育の重要性を説くために早口・多弁に豹変してしまった。E 局長は次官に昇進され、高木先生は彼との対談を設定して、自然文化誌研究会の活動、環境教育の必要性を話し合ってくくださった。ところが、E 次官は国会議員に立候補するところで、リクルート事件が発覚して、これに関与したとして失脚されてしまった。F 元次官からは、学者は王道を行けとお葉書を戴いた。高木先生もその王道通りに、決して政治家にはご紹介をしにくださらなかった。

しかし、この国は {注：漢字と平仮名は使い分けしている。私は日本くになが好きだが、国にはちょっと抗っている}、志を実現するためには、もちろん政治家と高級官僚の支援が必要だ。義父がたまたま建材業界団体の会長だったので、婿のために当時の G 総理大臣の支援団体理事長に紹介してくれ、ポンチャンは環境教育の大事さを申し上げた。H 理事長は自由民権運動の壮士のような風貌の方で、私が真摯に国事を思っていること

だと快くご援助を約束してくださった。G 総理は大学（旧制高校）の先輩でもあり、ご当人もご存じないところで、多分 I 秘書が環境教育の推進に手を貸してくださったのだろう。国土緑化推進機構の研究委員を少ししているのだから、砂防会館には時々行った。有力政治家の事務所があった本館をいよいよ取り壊して改築するのか。特別会議室の大ガラス壁のレリーフは素晴らしいが、もう見ることはないかもしれない。

このような経緯で、日本環境教育学会は創立に至った。高木先生のおかげで、北山財団の助成もいただいて、準備会事務局の運営もでき、自然文化誌研究会の岩谷美苗初代事務局長、小川泰彦第 2 代事務局長や小松真木子さんが手伝ってくださった。たくさんの楽しい思い出があるが、また次号にする。このところ固い話題が続き、ごめんなさい。でも、自然文化誌研究会の誇りを忘れないために、3 回は続けたい。冒険探検粉塵記はホームページでも読める。書ききれないので、そのうち、ナマステに載せない外伝も書くつもりだ。

追記：小松シズ子（2006）『いつかまた一真木子の波音』文芸社を読みかえしたら、涙が出た。家族が一番大事だ。ポンちゃんも今では、「おとうさん、（ママの）オトーション」だ。

写真：『野外教育シンポジウム』



東京学芸大学正門の案内看板



INCH メンバーによる開会の挨拶



石川英夫さんの講演。

○ 今後の活動予定のお知らせ (2016 年 秋～冬)

- 9/24-25 『INCH まつり～INCH ライブときのご採り』 @小菅村 日帰りでも 1 泊でも
 10/8-16 タイの皆さんの来日～一緒にご案内しませんか?9-12 は小菅、13-16 は東京です!
 12/10-11 『のびと講座 ふたご座流星群観望会』 @小菅村 1 泊 2 日
 12/23-25 『冒険学校 まふゆのキャンプ』 @小菅村 2 泊 3 日
 秋～冬はあんまり予定が無いですな。通常総会は年明けの 2 月に開催予定です!!

○ 事務局より

- 怒涛の 8 月を無事に終え、何か新しいことを!!と考え、翔くんとはるちゃんと 3 人の所有でバイクを購入しました。15 年ぶりのバイク、楽しみだな～。小菅では冬は乗ら(れ)ないんだけど・・・ クロ
- ↑ということで、私もバイクのオーナーになりますが・・・免許を取るところからスタート!!この際だから中型免許を取ると二人は言うのだけど・・・、中型で教習スタートしました!! はるこ

○ 事務局の麗しき日々

- ・さぶちゃん(田辺薫くん)結婚おめでとうございます!!
- ・和泉亜季ちゃんに第二子が誕生したもよう、おめでとう!!
- ・雫さんはキャンプの買い出し中に老眼鏡を購入していたもよう。
- ・たのさんが北海道へ移住して学校の先生になりそうもよう。
- ・翔くんの告白「ハイエースよりもジムニーが欲しいな!!」(続)
- ↑翔くんは乗り物オタク過ぎて、周囲は若干引いているもよう。
- ・風馬は 20 歳になったが、あだ名は変わらず「乗り鉄」のもよう。
- ・せいじゅは卒業後に INCH 事務局への就職を誘われているもよう。
- ・甲斐は「ポケモン GO」のおかげで毎日 6 時間歩いているもよう。
- ・新しいキャンプスタッフの平田ちゃんは仙人を目指しているらしい。
↑それならキャンプ場の善さんに弟子入りしろと満場一致しました。
- ・今後の活動予定の内容が少ないと、このコーナーに苦戦するもよう。
- ・ひっしーの禁酒は解禁となり、許可制になったもよう。
- ・タイから帰国したにえるは、ごみ・ごめさんの影響か?角がとれたもよう。

○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか?

略称 INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、30 年以上にわたって活動を続けています。2004 年から NPO として再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF 環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エココミュニティづくりを行っています。

本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。会員には以下 8 つの種類があります。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額(1～12 月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員:10,000 円 一般会員:5,000 円

学生会員:3,000 円 賛助会員(個人・団体):10,000 円

家族会員:6,000 円 特別維持会員:100,000 円

植物と人々の博物館友の会会員:3,000 円

小菅村特別会員:1 口 1,000 円から

成合基金(冒険探検基金):「成合基金」と記載してください。

郵便振替口座 : 00100-2-665768

口座名 : 特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 125 号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌
 <発行日>2016 年 9 月 10 日
 <編集>自然文化誌研究会 事務局
 <発行>特定非営利活動法人

自然文化誌研究会
 The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2
 TEL :0428-87-0165・090-3334-5328(事務局黒澤)
 E-mail: npo-inch@wine.plala.or.jp
 H P : <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>
 事務局ブログ: <http://npoinch.naturum.ne.jp/>